

地方だより

新潟地方気象台予報課



36. 1. 2. 高田市の道路の雪

予報課は終戦の翌年6月混乱と虚脱の時期に誕生した。これまで複雑な気象条件も加わって、開発後進地域を余儀なくされていた日本海側地方に、将来の明るい躍進を目指す科学の「メス」を入れる片棒を担うんだという気迫に満ちて、「貪慾」なくらいに活動された先輩諸兄のことは、大方のご記憶に残っていることであろう。又北陸気象官署が労を分かち一体になって本庁と協力し、雪と季節風の調査研究に取組まれた「予報だより」が、昭和25年1月から「北陸地方予報ノート」発刊へと発展したのも、その躍動の象徴としてご理解願えるであろう。今日も尚偉績に心を尽し、続刊に努めているが、技術躍進と社会事情の発展によりそのあり方に悩みを感じている。

日本海側特に北陸地方は「雪の新潟」で代表されるよう

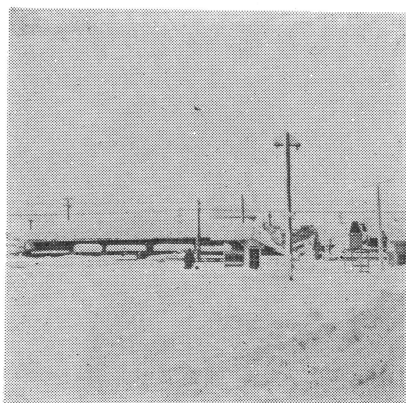


35. 12. 31. 高田変電所大町線

に、冬の真盛りには毎日のように雪が降る。雪で盛装した連山の山容や庭園、樹木の雪景色を眺め、「こたつ」でうまい酒をくみかわすのは誠に嬉しい風流な「レクリエーション」の一つであるが、人口の集中、産業の躍進、生活の近代化につれて、里雪型の大雪を大敵とするようになって来た。防災気象予報の高い精度が要望されてきた訳である。当台が名付親になっている所謂「北陸不連続線」の解明が、その対策の重要な鍵の一つになっている。幸い昨年度は東京管区気象台で北陸不連続線の予備観測が実施され、本年度から本庁で北陸豪雪機構解明の研究計画が採用されたので、その成果に非常な期待をよせている。

昨年は年末年始の里雪豪雪に初まり、2月には長岡地震、6月末には梅雨前線豪雨、8月の5日と20日には中越地方（長岡方面）を中心とした集中豪雨、9月16日には第2室戸台風というように第1級の気象災害を総て体験して寧日がなかった。この体験を如何に生かしてゆくか大きな宿題にしている。昨年の大雪状況は写真を参考にして豪雪振りをご想像して下さい。

(1962. 11. 坂田初太郎記)



新潟地方気象台構内 36. 1. 18.
120cm (創設以来の新記録)